

拓殖大学地域連携センター設置記念

公開座談会「拓殖大学と地方創生」



(会場風景：恩賜記念館「記念講堂」)



拓殖大学は創立120周年を迎えます

公開座談会

日時：平成30年4月26日（木）13：30～15：30

場所：八王子国際キャンパス恩賜記念館「記念講堂」

テーマ：「拓殖大学と地方創生」

パネリスト：川名明夫学長（地域連携センター長）
徳永達己国際学部教授（地域連携センター会議委員）
永見 豊工学部准教授（地域連携センター会議委員）
土川優作工学部4年（永見研究室）
高橋美憂国際学部4年（徳永ゼミナール）

プログラム：1. 拓殖大学と地方創生
2. 地域連携センターの設置
3. 学生たちの地域貢献 永見研究室の事例
4. 永見研究室 学生報告
5. 学生たちの地域貢献 徳永ゼミナールの事例
6. 徳永研究室 学生報告
7. 地域センターの展望（ディスカッション）

パネリスト



川名明夫学長



モデレーター
徳永達己教授（国際学部）



永見 豊准教授（工学部）



土川優作（工学部4年）



高橋美憂（国際学部4年）

公開座談会 「拓殖大学と地方創生」

一・拓殖大学と地方創生

徳永 皆さん、こんにちは。

本日は、拓殖大学地域連携センターの設置記念公開座談会として、「拓殖大学と地方創生」と題する座談会を行います。私は本日の司会、コーディネートを担当いたします国際学部の徳永達己と申します。よろしくお願いたします。それでは、まず、「拓殖大学地域連携センター」の設置の経緯につきましまして川名学長からお話しをいただきます。学長、お願いします。

二・地域連携センターの設置

川名 皆さん、こんにちは。学長の川名でございます。

今、徳永先生からございましたように、四月から拓殖大学地域連携センターというものをつくったわけですが、その設置のいきさつとその目的といったところを簡単にお話しさせていただきますと思います。

皆さん、ご承知のとおり、本学は一九〇〇年（明治三十三年）に桂太郎公によって、国際的な舞台で活躍できる人材の育成ということで設立されたわけです。その後、本当に海外で活躍する皆さんの先輩たちはたくさんいて、それも海外のいろんな地域、そういったところで本当にその地域の人々と一緒に活躍して、今でもそうやって活躍している人たちがいっぱいいるわけです。そういう意味で、皆さんも、この拓殖大学も、その伝統をずっと引き継いでいるわけです。

このような本学の建学の精神を生かして「拓殖大学教育ルネサンス二〇二〇」の中では、人材育成の目標として、

世界的な視野に立って国内外の地域の人々と協働して課題の設定と解決にチャレンジするようなタフな人間力を持った人材の育成というのを掲げて、これまでいろいろと教育改革を進めてきているわけです。

「拓殖大学教育ルネサンス二〇二〇」の中では、国際性、専門性、人間性を備えた人材の育成を掲げているのですが、国際性、専門性といったものは皆さんが授業の中で受けることによって多分、身につけることができるだろうと思います。しかし、人間性、タフな人間力とか、そういったものは、これはなかなか教室の授業の中では身につけることができない。それを学生の皆さんに身につけてもらうために、これまでいろんなゼミの先生方が学生の皆さんと一緒にやって地域に出て行って、その人たちと一緒にやってその問題の解決、そういったものを図るということを実践してきているのではないかと思います。そういったところで、本当にタフで立派な学生さんたちがいっぱい育っているというのを見て、やはりそういったところに力を入れる必要があるだろう。そのために大学全体としてもしっかりとした組織を持つ必要があるだろうということで、この地域連携センターの設立に至ったということでございます。今まで各ゼミ等を中心に、ばらばらに、その地域と協力しながらいろいろやっていたいただいていましたけれども、もうちょっと大学全体としてオーガナイズした形でやっていければということで設立したわけでございます。本学としては、そういう地域創生への貢献においても、本学の建学の精神に則り進めたいと思っています。先ほど申し上げましたけれども、本学の建学の精神が、国際大学として国際的に活躍できる人材の育成にあります。日本で今言われている地方創生や地域振興というのは、日本の中だけでしか考えていない。幸いに本学は今、司会をなさっている徳永先生が先頭に立って、例えば開発途上国での地域の開発、そういったものと日本の中での地域の開発というのが結びつけられるだろう。これは、今まで日本の中でもあまり取り上げられていないという部分もありますので、ぜひそういった形を本学の特徴として生かしながら、単に日本の国内だけではなくて、国内外をうまく結んで連携させたような地域創生、そういったものをやっていきたいと思っております。

それと、もう一つ、本学の大きな特徴は、非常にしっかりと先輩方のネットワークがいろんな地域にあるという

事です。ぜひそういったネットワークも使わせてもらいながら、地域との連携を図って、それを皆さん、学生の皆さんの、ある意味、勉強の場として使っていていただければというふうに思っています。

地方創生と一言で言いますが、これはなかなか難しい話で、実は先々週、多分、後で出てくると思いますけど、増田元総務大臣が文京のほうにいらっしゃって講演してくださいました。彼は限界集落とか、そういうことで、今にもあつという間に多くの小さい村がなくなっていくだろうという話をなさっていました。

実はおとといは釜石の野田市長がいらっしゃっていました。野田市長のお話もお聞きしました。そこで、はっと思ったのですが、野田さんがおっしゃるには、要するに復興というところでいろんな会社とか、そういったものが確かに釜石に来て一生懸命やっていたらいい。最初のころは結構、それで釜石の人たちの、地元の人たちのいわゆる仕事といますか、それができたのはいいんですけど、今度はこの人手不足の中、逆にせっかく地元を誘致したのに、今度はその地元には働き手がない。そうすると、誘致するときには人も一緒に実は釜石に持ってきてもらわないと今は動けないんです。外から見ていると、企業がどんどん行けば働き口がいっぱいできて、すごくいいんじゃないかと思えますけれども、やはり単にそれだけではなくて、今度はそこでむしろ人手が足りなくなって、いろんな問題が起きています。そういう意味で、地方の問題とか、そういった問題というのは多分、現場に出て、現場で肌で感じてみると、その問題というのは解決できないと思います。そういう意味ではぜひこの地域連携センターを使って、先生方も、それから学生さんたちも一緒になって、本当に地域に出て行って、そこで肌で問題に触れて、本当に考え抜いて、何か僕らでもできるんじゃないかということを考えてやっていただければ、本当に力のついた学生さんも育っていきますし、それが本当に地域の振興に貢献できれば、それに越したことはないというふうに思っております。

こんな考えで地域連携センターを今回、設立しました。動き出すのはこれからですが、後で出てくると思いますけれども、既にいろんな地域と連携協定を結んでいまして、そういったものとうまくシンクロナイズさせて、大学全体

として何か力が出せるように、ぜひやっていきたいと思えます。ぜひ皆さんも一生懸命こういったものに参加してやっていただければと思います。以上で一応、説明を終わります。

徳永 ありがとうございます。

三・発表者の紹介と公開座談会の趣旨

徳永 進行の不手際で、本日の発表者を紹介するのを失念しておりました。永見先生から自己紹介をお願いします。永見 工学部デザイン学科の永見豊です。徳永先生とはまちづくりのプロジェクトで一緒に活動した縁で、この会に呼んでもらいました。よろしくお願いします。

土川 工学部デザイン学科所属の永見研究室の土川優作と申します。本日はよろしくお願いします。

高橋 国際学部国際学科の四年の高橋美憂です。徳永ゼミに所属しています。本日はよろしくお願いします。

徳永 それでは、まず私から、本日の公開座談会の趣旨について簡単に説明します。まず、最初に地方創生です。

今、学長からお話がありました元総務相の増田寛也さんによると、このままでは二〇四〇年には千七百十八の地方自治体のうち五百二十三が消滅する、つまり、私たちの自治体の三分の一がなくなる、と言われております。これはまずいということで、二〇一六年に政府の基本方針として、「まち・ひと・しごと創生基本方針」が公表されました。内容は六つです。人の流れを地方呼び込む、企業や政府を地方に移転を促す。それから、本日会場にいます皆さん方、東京圏の学生の地域インターンシップなどからなっております。

地方創生の課題を整理します。統計的に人口が減少しています。特に若い世代、若年層、働く世代ですね。就業機会が少ない。地域のコミュニティの意識が希薄化している。それから、空き家、空き店舗の増加。地域のいわゆる空洞化が起きているところがあります。さらには、インフラの劣化、維持管理費の増大も指摘されています。

これはよく考えてみると、課題の原因は、グローバル化に地方が適切に対処できていないということかと思えます。グローバル化に対処するには、効率性を求めます。効率性を求めると、必然的に東京に人とか、お金とか、そういうものが集まってきてしまう傾向があります。

続いて、きょうのキーワードの一つ、まちづくりという言葉が簡単に定義します。まちづくりというのは、愛着と誇りを持って暮らせる物的・社会的環境を維持・創造することを目的として、住民——私たちですが、あるいは住民が主体の一部になって、係る主体が責任を担える範囲、空間的範囲において行われる、終わりのない永遠の取り組みと言われています。これは、私なりに解釈すると、まちづくりというのは、「私たち」という言葉がまずあって、「私たちのまちづくり」、それに「活動」を入れると、意味がわかるのではないかと思えます。「私たちのまちづくり活動」、これが一般的に言われているまちづくりの意味かと思えます。主要な大学で地方創生に対する取り組みが行われております。特に国立大学における取り組み。それから、首都圏に目を向けても、多くの私立大学で特色のある取り組みが行われております。例えば、大正大学では地域創生学部という学部を立ち上げるなど、積極的に取り組んでいる事例もあります。

これらを整理しますと、大体五つの体系に分類できるかと思えます。まず一つ、学部、地域連携センター、研究所を設立すること。発信母体をつくるわけですね。二つ目は、教育研究機関の拠点づくりを地方の中核と連携して行う。いわゆるサテライトキャンパスなど、地方にその大学のキャンパスをつくる。それから、大学同士の、大学間の連携、産学連携、地方インターンシップの実施。最後に、地域振興計画やマスタープランなどを策定するなどです。

地方創生は、地方の大学にとって、みずからの存在をかけた取り組みとなっております。首都圏、我々のような大学については、若干、立ち位置は違いますが、重要であることは変わりありません。我々も地方から学生を大学として引き受けているわけですので、地方の人材育成をどうしていくのか、そして付加価値をつけてどうやって地方に帰していくのか、それが大事なことになります。恐らく課題としては、事業の運営費、あるいは連携、役割分担、継続

性の確保、あるいは単位やその取り扱い。そして、どうやって効果を検証するのかというところも課題だと思います。地域の活性化を図るには、そこで住み続ける住民が中心となってやっていくことが望まれるわけですが、圧倒的に若い人が少ないという現状を踏まえすと、我々のような大学が持っているポテンシャルを生かして、地方に対して、貢献するということが大切だと思います。

本学の取り組みです。地方創生に対する取り組みはすでに行われております。いくつかありますが、後ほど説明します山梨の富士川町における包括連携協定を通じた活動、それから商学部の日ビッド・ブルーカ先生がやっている学生の田植えの体験などがあります。それから、永見先生にこれから説明していただきますが、工学部で非常に積極的にいろんなことを取り組んでいます。

最後に、特筆するものとしては、山梨県立大学と山梨総合研究所の三者連携というのが昨年の十一月に結ばれて、三者の産官学が協調して山梨市の地域振興に努めていきたいというようなことも考えている次第です。

以上で趣旨について説明しました。

まちづくりに学生が絡むということは、その地域とその学生と我々大学、この三つがある意味でワインウィンとなる関係です。この地域と学生と大学がワインウィンになる関係というのは、よく考えると、地域おこし、あるいはまちづくりしかないんじゃないかなと私は思っています。

それでは、永見先生、工学部のデザイン学科の取り組みを教えてくださいませんか。

四・学生たちの地域貢献 永見研究室の事例

永見 学生がまちづくりに参加することで、課題に取り組む姿勢が意欲的になりました。これから意欲が向上したと私が実感した事例を紹介していきたいと思います。

まず自己紹介です。私は拓殖大学に来る前は建設コンサルタントにいました。橋の設計が強い設計会社で、瀬戸

大橋やレインボーブリッジなどを設計していた会社です。その会社でいくつか橋の設計をして経験を積んだ後に、海外の橋のプロジェクトにも参加させてもらいました。海外のプロジェクトの多くはコンペ形式です。コンペに勝たないと設計を受注できない。そこでいくつかのコンペに勝って設計を受けたり、アイデアコンペに入賞しました。とてもうれしい経験でした。大学に来てからは土木構造物の景観設計、インフラの整備が減ってきたため、現在は安全に走れる空間づくりとして道路のデザインや、地域活性化にも取り組んでいます。もう大学に来て十何年経つのですが、最初はとにかくわかりやすい講義をしようと思ひ、パワーポイントをつくり込んだり、関連する資料をたくさん配ったり、多くの情報を提供すれば良いと考えていました。その後、文部科学省から就業力育成、産業界のニーズに対応した人材育成が求められるようになり、企業との連携や発表会、コンペへの応募を増やすようにしました。その次に、先ほど徳永先生の説明のとおり、地域創生のニーズが高まり、現在は地域との連携やグループでの意見交換を取り入れるようにしました。この取り組みが学生の成長にとっても有効であると実感しています。

授業に対する学生の姿勢は、最初のころは受動的でしたが、発表会などを入れることで主体的に学ぶようになり、グループワークによりお互いが協力して進めていくようになりました。これから、その変化を紹介したいと思います。企業との連携とか、コンペに出すということで、私もコンペに入賞した経験があったので、学生に積極的に参加を促しました。入賞したのはこれだけあります。やはり入賞した学生はすごく自信になって、次もチャレンジしようという、意欲が向上しています。ホームページにも掲載してもらい家族に紹介できるとか、実績を就職活動にも活かせるなど、とても良い経験となります。コンペに入賞するというのが、まず一つ、目標になりました。

二〇一五年に同じようにコンペを探していたときに、大学生観光まちづくりコンテストというのが目につきました。全国の大学生が競い合うコンテストで、社会人が入ってしまうとなかなか入賞できないのですが、学生対象では入賞する可能性が高まります。まちづくりコンテストで良かったのが、フィールドワークをもとに地域の課題を明確にして企画を立てることが条件になっていたことです。この年に参加したテーマは青森県の活性化で、青森での体験をも

とにまちづくりプランを考えるものでした。事務局がJTB、後援は観光庁や文部科学省などです。

五人のチームを組んで、三年生が参加しました。運よく青森ステージの本選に出場が決まり、青森会場で発表しました。内容は、インターンシップを通して地域に行って地域の良さを知ろうというもの。彼らは青森に調査に行った時に、有名なねぶたの歴史を勉強して、ねぶた祭りに協力をするインターンシップで行けば、学生は興味がわき、地域の協力もできるし、単位が取れるというアイデアを出しました。二回ぐらい現地調査に行ったので、すごくチームがまとまっていつているなど実感しました。

発表して、クリエイティブ賞という賞を取りました。これは四番組ぐらいの賞ですね。最優秀、優秀、特別賞の次です。彼らにとっては自信のある内容だったので、四番組の賞ということでとても悔しい思いをしていました。何か物足りない。もっとできるはずだという気持ちがあったようで、四年生のときに彼らが卒業研究で私の研究室に入ってくれたので、またまちづくりのこういう企画がありますよと提案しました。潜道先生から紹介があつて、広島県呉市にある三角島の活性化というアイデアをデザイン学科の人も考えてほしいというものでした。それに三人が参加しました。あとは八王子のまちづくりにも二人が参加しました。

三角島の活性化のプランに三人の女子学生が参加したのですが、これが広島県の呉市にあるのですが、この三角島という小さい島です。橋が通って陸続きですが、ここからはフェリーで行かなきゃいけない。人口が三十人、平均年齢が六十五歳、十年後には半分ぐらいの人口になりそうな、正に限界集落のような場所です。そこに調査に行つて、話を聞いて、そのときに潜道ゼミとも意見交換をしながらプランを決めていきました。

現地調査ですね。やっぱり二泊三日ぐらいで、チームというか、非常に仲がよくなって、現地の人とも楽しく交流がありました。潜道ゼミからは鈴木君と違ってグランプリを取った学生も一緒でした。

工学部の卒業研究は一人一テーマになっているので、志賀さんはこの三角島をテーマに子供たちのキャンプ場を企画しました。民家が少なく夜が真っ暗になって、星空がすごくきれいになるというのに気がついて、キャンプの企

画を立てました。私は企画のパンフレットをつくれば十分かなと思っていたら、すごくアイデアがいっぱいあって、パンフレットのほか、吊り広告のデザインとか、民家を改修して受付をこうやってやるという模型、さらには呉市役所まで行ってプレゼンテーションをして、こういう企画があるけど実現化できないかということまで進めました。私が想像する以上の成果を上げました。

もう一人、深見さんは、この島のブランド価値を高めるために、色彩計画で学んだ知識を生かそうということで、色の計画、色でブランド価値を高めるといふ企画をして、同じように呉市役所に提案に行って、本当にプロがやるような仕事だと褒めていただきました。他には八王子のまちづくりのお手伝いということで、河川の計画や公園のリニューアルなどを、残りの学生が取り組みました。

このことで気がついたのは、やっぱり三年生の時にこのようなまちづくりのコンテストに出ると、非常にモチベーションが上がることです。二年目には同じように大学生観光まちづくりに応募してもらいました。二チーム参加したうちの二チームは本選に出場、もう一チームは本選に出場にならなくてポスター発表になりました。

そうすると、やっぱりライバル意識があるんですね。落選して悔しい。コンソーシアム八王子学生発表会というのがあるって、そこでチャレンジしたらどうかと提案すると、彼らはまたさらにアイデアをブラッシュアップして、最終選考会で特別賞をもらいました。

その後、三年生の後期に徳永先生が、富士川町のシンポジウムがあるから、まちづくりの事例を紹介してくれないかと誘っていただき、この二チームに声をかけたら、ぜひ発表したいと。シンポジウムでもしっかり発表して、ゆずの香りとかレンタサイクルというアイデアが道の駅に導入されました。

彼らは四年生のときにもかなりしっかりした卒業研究をして、このまちづくりの経験により非常にモチベーションが上がりました。そして、昨年の二〇一七年も同じようにまちづくりコンテストで出されたのですが、本選には選ばれなかった。その彼らはコンソーシアム八王子の学生発表会で最終選考会に進み、奨励賞を受賞しました。

きよう発表する僕の研究室の土川君のチームは、コンソーシアム八王子学生発表会で落選し、口頭発表だったので。それが悔しい思いがあつて、工藤先生の鹿教湯温泉の活性化に積極的に参加したり、別の学生は徳永ゼミと合同の学生チャレンジ企画で準グランプリを取りました。最初に外部の発表会に参加すると、その経験で自分でも何かできそうだという手ごたえを感じて、再チャレンジによって入賞を取って自信につながり、卒業研究では非常に主体的な取り組みに結びついていきました。

簡単に紹介すると、大分ステージでは、こういうまちづくりのポスターを張って活性化を提案したり、自転車チームでは落選してしまったものなのですが、山梨の自転車レースを企画する。これが本選に行かなかつたので、八王子の発表会では、さらに八王子で自転車レースをするという企画を立てて特別賞を得ました。まちづくりシンポジウムでは、さらに富士川町のレースを企画しました。もう一つのチームは、ゆずのまちの富士川町を紹介しました。さらに、自転車チームは、今までやった作品を編集して自主的に作品集をつくり、それをもとに就職活動に結びつけるか、主体的な活動を見せていました。

二〇一七年度は高尾山と拓殖大学をつなげようというアイデアがあつて、まちづくりコンテストは失敗したのですが、コンソーシアム八王子では特別賞を取りました。

徳永ゼミと合同チームに参加したデザイン学科の原さんは「みみ」料理の紹介に参加して、学生チャレンジ企画で準グランプリを取りました。以上のことから、私が感じたことをまとめてみます。

地域活性化プロジェクトに参加することによって、まずフィールドワークですね。はじめに学長が説明されたとおり、地域の人と一緒に地域の課題を考えると、非常に参加意欲というか、地域の課題を実感できる。長時間、チームで行動するので、チームの共同意識が高まる。

二つ目。若者のニーズですね。地域の課題はやっぱり、若い人、働き手に来てほしい。ということとは、大学生自体が、この地域にどういう魅力があつたら自分たちが行きたくなるかというふうに分りに問うことができるんですね。

どんな体験がしたいか。そういうふうに関わることによってマーケット感覚が鍛えられる。

そして、学外での発表会。評価を受ける緊張感とか、入賞したときの喜び、落選したときの悔しさによるモチベーションの向上。あとは所属学科での学びの強みをさらに実感できる。デザイン学科のアイデアの視覚化というのはごく武器になるのだなと気づきました。

最後に、地域連携センターへの期待です。

今までやってきたのは、外部の発表会に参加するというものなのですが、もし本学でこういう発表会を企画できるなら、それが一番いい。特に遠方での企画の場合は交通費が負担になってしまうので、近隣地域の連携でこういう発表会ができるといいなと思います。次に、活動のPRです。学生の活動実績となるようにホームページに掲載するとか、メディアへの働きかけによって、かなり学生のモチベーションがアップします。次に、他学部・他学科との連携。所属学科だけじゃなくて、いろんな学部・学科と一緒に連携することで、自分の強みを理解できる。

最後に、地域活動の継続です。今までのアイデアコンテストは、ただアイデアを出して終了だったんですが、提案が実現するというのがやっぱり非常に大事なことで、継続して実績をつくっていくというのを期待しています。学長が最初に説明されたとおり、タフな人間力を育てるというのは、地域連携の取り組みが非常に有効であると感じております。以上で発表を終わります。ありがとうございます。

徳永 ありがとうございます。

五・永見研究室 学生報告

徳永 それでは、土川君、お願いします。

土川 改めまして自己紹介させていただきます。工学部デザイン学科四年、土川優作と申します。本日はよろしくお願ひします。

これは私が一・二年次のとときの作品です。最初は遊具やステーションヨナリー、エンブレムなどに学びました。三年生になると、モノのデザインより、テーマを前提としたコトのデザインをやるようになりました。こちらは「伝える」というテーマで私が考えた、香りを伝えるデバイスを考えました。

そして、同じ授業では、館ヶ丘団地再生アイデア計画というのも行いました。現地調査をし、発表会で自分の提案を発表するという場を使わせていただき、バイク好きのためのライフスタイルの提供というものを提案させていただきました。

そして後期には、先ほど紹介していただいたコンソーシアム八王子に参加させていただき、私は八王子の団地を対象としたウォーキングプロジェクトを企画しました。主な内容としまして、大学とUR都市機構が契約し、団地の空室を学生寮として学生に提供するという提案です。こちらをUR都市機構にヒアリングしたところ、高い評価をしていただき、手応えを感じました。こちらの発表会ではグッズ提案をしまして、バッジやマフラータオルなどのデザインを考えました。ですが、結果は入賞できず、審査員から、実現性の課題や関係機関への調整などが必要だというアドバイスをいただきました。

そして後期には、感性デザインコースの課題にチャレンジもさせていただきました。工藤先生が行っている鹿教湯温泉のボードゲーム制作にも参加させていただき、私はこういったボードゲームを制作しました。小さい子供でも簡単に遊べるようなデザインができたかと思えます。こういった地域連携型の事業を通して、学生は現地の人から直接、話が聞けるので、課題が実感できると思います。

そして、ほかの授業と比べて調査から制作まで時間をかけて行うから、考えて制作する力がよりつくと思います。そして何より、他の授業より楽しいです。そして、こういった課題はチームワークが多いので、団結力が養われると思います。

私はこれから地域連携型の授業などで得た経験を生かし、人のためになるデザインをしようと考えております。こ

れからも地域連携型のデザインを考えていきたいと思っております。以上です。

六・学生たちの地域貢献 徳永ゼミナールの事例

徳永 続きまして、私の研究室の活動を紹介したいと思います。皆さんちょっと雰囲気がかたいですね。大丈夫です。テレビに中継されているわけじゃないので、気楽にやってください。いいですか。それでは、発表が終わった後、やる前にも拍手していただくと……。ちよつと拍手してくださいね。(拍手) 別に求めているわけじゃないんですが、ちよつとリラックスして。皆さんも参加しているという感じで聞いていただきたいと思います。

さて、私どもの研究室でやっている活動についてご紹介します。国際学部はゼミという言葉を使うんですが、私の場合は、他学部の学生や他ゼミの学生、大学院生や私自身の研究もやっているのです、それを一緒にまとめて研究室の活動ということで説明いたします。

私の研究室は、国際開発を専門にしております。私自身は、永見先生と実は同じで、建設コンサルタントです。私の場合海外でずっとプロジェクトをやっていました。インフラ開発(都市計画)、プロジェクトマネジメントが私の専門ですが、学生をみんなアフリカに連れていくわけにいきませんので、近場でフィールドワークの場として、目をつけたのがこの富士川町です。ここをフィールドとして地方創生、まちづくり活動に対する調査研究を行っております。

どういふことをやっているかというのと、永見先生が、どちらかというところに対してアプローチされていらつしやるのに対して、私は一点主義で、とことんやるというようなスタンスで臨んでいます。

きっかけですが、これは永見先生からご紹介いただきまして、私が大学に着任した二〇一五年に大学観光まちづくりコンテストに参加しました。そのときまたまた対象となった地域が、この富士川町でした。

翌年の二〇一六年、第一期生のゼミ生と本格的にフィールド調査を始めております。

韓国との留学生の交流もやりました。

さらに、二〇一六年十月、研究成果を発表して、工学部のマレーシアの留学生と一緒にフィールド調査をしたり、大学コンソーシアム八王子の市政提案もしました。

富士川まちづくりシンポジウムというのを昨年開催し、国際学部の留学生であるタイと台湾の学生を農家民宿に派遣して、現地からSNSを通じて地域の魅力を発信してもらったりしました。

それから、昨年は、大学事業である「学生チャレンジ企画」に応募して、郷土料理の「みみ」を使った地域ブランディング化という企画を提案しております。

それから、九月二十四日、本学と富士川町で包括協定を締結しました。その際、道の駅において試作品である新作「みみ」の紹介を実施しております。

これから山梨県、および富士川町を対象とする事業構想を申し上げます。構想名は、「プロジェクトYターン」というものです。山梨は隣の県ですね。世界遺産の富士山を始めとして、ワイン、果物。果物の生産量は日本一です。それから、ふるさと暮らし、移住希望者にアンケートをすると、大体ナンバーワンに長野か山梨が候補になったりします。

ところが、実は空き家が多いんですね。割合にしても四軒に一軒が空き家ぐらいのペースです。そこで我々が提案したのがプロジェクトYターンです。山梨は東京に近いので、いわゆるIターン、Uターン、Jターン、あれは一方通行です。行ったらおしまいなんです。そうじゃなくて、山梨のYの形みたいにして、行ったり来たりする、いわゆる交流人口をふやしたほうがいいんじゃないかなというのが我々の提案でした。そこで、八王子あるいは都会と地方、山梨を行ったり来たりするようなやり方で結ばばどうかということですよ。

具体的には三つ提案があります。一つ目は、留学生の人たちの週末ホームステイの実施です。八王子と甲府なんて一時間ぐらいで行けますので、そのぐらいの距離感でやれるのではないかと。八王子は、後ほど説明しますが、学生数

が十一万人います。富士川町は人口一万五千人です。このような地理的、量的なポテンシャルを生かすが良いのではないかと思いました。留学生は週末に山梨の空き家を使って一泊してくるといふのもあるのかなど。

それから、二番目は、デザイン学科の学生を対象とするものです。デザインをやるときにアトリエが必要なんです、そういうのを地方で受け皿としてはどうかというようなものです。

八王子は大学が短大を入れると二十五校あります。学生数は十一万人、留学生は三千人。こういったポテンシャルを生かして、山梨みたいなどころと行き来をするような、お互いがワインワインになるような関係を築き上げれば、人の流れが出てくるんじゃないかなと思いました。

続いて、去年実施した郷土料理を活用した地域ブランドの創生プロジェクトです。これは本学の学生チャレンジ企画で提案したものです。富士川町まちづくりシンポジウムの中で比較的評判がよかった郷土料理を使ったまちおこしです。富士川町には「みみ」というほうとうに似た料理があるんですが、これをいろんなやり方で学生なりの視点で発信し、知名度を上げていこうという取り組みです。最近では、いろんな地域のグルメに注目が集まっています。富士川町は、ここから高速バスで行けば二時間程度で行ける距離のところにあります。ゆず、しいたけ、まいたけ、そんなようなところが特産物で、富士川がきれいなんです。これが「みみ」です。ほうとうですけれども、小麦を使った料理なんです、形状はござみみたいな「箕(み)」という農具に似ているので「み」、二つ続けて「みみ」ということで、福をすくい取るといういわゆる縁起物で、正月や結婚式に食べられるものです。これに注目して売り出そうというのが我々の企画です。これにより地域ブランドの向上を図り、地域の価値を高めるといふものです。

富士川町としてはこの「みみ」という郷土料理を売り出すということで知名度が上がります。学生はそういったまちづくりの経験を通じていろんな学びを深めますし、郷土料理に対する理解を深める。大学のネットワーク、地域とのネットワークができるのではないかなということを取り組みました。

これは試食会に向けた準備をしているところで、地元の食生活改善委員という方々にご協力いただきまして、いろ

いる教わりながら料理をつくりました。

これは九月二十四日、包括連携協定を結んだときの写真ですが、このときに志村町長の前で我々の試作品も発表させていただき、試食会も道の駅で行いました。

せっかくですので、ちよつと「みみ」料理を紹介します。「みみ」というのは、温かいつゆで食べるんですが、「ゆずぼんみみ」という、ゆずで味付けしたものです。「みみストローネ」は、ミネストローネ風に食べます。

これらのものをSNSを活用したり、クックパッドですとか、ユーチューブなんかで発信していくところまでやっております。将来的には学食でも販売し、道の駅でももちろん出して、カップめん等で出すということまで持っていきたいと思っておりますが、そういうことを地元の人たちと一緒にやっています。

ちよつと話が変わります。これは大学院生なんですが、大学院生は、留学生が多いんです。例えばベトナム、台湾、中国などの留学生です。これは箱根芦ノ湯で合宿し、観光振興の案を披露したものです。

それから、今度は科研費を使った研究の話です。これは私の研究ですが、住民参加型のインフラ整備の有効性の検証と題し、武田先生と共同してやっております。

簡単に説明します。アフリカなどの開発途上国ではなかなか公共工事ができないので自分たちで工事をやるという事業があります。レイバー・ベースト・テクノロジー（LBT）と言いますが、住民の労働力主体の工事なんですけれども、これがもしかしたら今の日本でも使えるんじゃないかなと思っています。

これをやりますと、今、地方はインフラが疲弊しているんですけれども、かなりコストダウンで工事ができます。また、単に物ができるだけじゃなくて、それに住民がかかわるということで、インフラに対する愛着がわいたり、地元意識が高まるというところに期待しています。

これはタンザニアでやっている工事です。住民の皆さんは農家の方が多いので、仕事になれているところがあります。

日本でも似たような事業があります。「道普請」というもので、私の調べる限り、全国で二十五件ぐらいやっています。有名なところは長野県にあります、飯田よりちよつと南にありますけれども、南信地区の下條村というところでは、セメントを使ってコンクリートでならして住民が道路を直しています。この地域の方もやはり兼業農家の方が多いので、工事を進めるのに抵抗が少ないというところがあります。

L B Tというのは、実は我々の身の回りに結構あります。例えば町内会、自治会、P T A、N G O、N P O、まちづくり、むらおこし。下條村の建設資材支給事業もその一つです。このように我々自身がそういったインフラ整備をやることによって地域に愛着を持つことができるのではないかなと私は思っているところです。

まとめます。まちづくりを成功させるための三つの要素というのがあります。皆さんご存じでしょうか。私のゼミの学生は知っていると思うんですが、三つです。よそ者、若者、ばか者です。まちづくりの課題というのはなかなか自分たちだけでは解決しないところがあります。よそ者。よそ者というのは、外からの視点で何かを導入できる人です。必ずしもよそ者じゃなければいけないというわけではないですが、外からの何かの新しい視点を持ってその地域を変えられる人。若者。これはパワーのある人です。年をとっても気持ちの若い人もいっぱいいると思います。ばか者。これは何かやり出したらとまらない人です。この三つの人たちが融合することによってバチバチと化学反応が起きます。これがまちづくりに対して原動力になるんじゃないかなということなんです。そこで、私どもは、住民参加型のL B Tを活用したモデル事業を地域に提案していきたいなと思っています。

最後に、八王子学生まちづくり共同体という、大学コンソーシアム八王子という企画コンテストで我々が提案したものを紹介します。これは我々の経験から出したものなんです、八王子というこのポテンシャルを活かした提案です。圏央道ができました。高尾から千葉方面までつながっていますよね。圏央道がつながって、中央道、鉄道は中央線もあります。それから、もう少ししたてば橋本にリニアが来ます。八王子が交通の中心になることを前提とした、いわゆる副都心構想です。ここを中心として学生まちづくりの協議体みたいなものをつくり、学生、地方、八王子市と連

携しながら周辺地域のまちづくり支援をしたものです。

そんなものをやる人がいるのかと思われるかもしれませんが。そこで我々はアンケート調査をしました。サンプルは百三十二名です。八王子キャンパスではまあまあ大きな数ですね。びっくりしたんですけれども、まちづくりに関心があるというのは四二%です。本学は一人学生がいるとすれば四千人となります。ですから、八王子に学生が十一万人いるとして、ざっと見ても三〇四万人は、こういう我々みたいなまちづくりに関心を持っているのがあると言えます。そういう学生を生かしながらやるということが、まちづくりでは有効なものではないかなと思います。

地方は人が足りません。若い人がいません。若い人は、我々は現場へ行きたいとか、経験を積みたいと思っている。そういう意味でウインウインの関係をマッチングさせて、大学だからできることをやっていくということが重要なということです。拓殖大学から発信する地方創生のまちづくりというのが、今、我々の掲げているテーマです。

それでは、ゼミ生の高橋さんにバトントッチしたいと思います。私の発表はこれで終わります。

七・徳永研究室 学生報告

高橋 こんにちは。先生から先程私のゼミで行っているまちづくり活動について詳しく説明してもらったと思うので、私はそのまちづくり活動を通して学んだこととこののを、皆さんに紹介できたらなと思っています。

先生のおっしゃったとおり、山梨県の富士川町というところで主にまちづくり活動に励みました。一番最初にやったことというのは、空き家や廃校の現状調査をしました。空き家を実際に所有している方に協力をいただいて、実際にゼミ生のみんなでそこに宿泊し、空き家は実際にどれだけ潜在価値があるのかというのを身をもって知ることができたなと思っています。あとは、町長へのインタビューをさせていただいて、町長のまちづくりへの関心だったり、現状みたいなものを聞いたり、伝統料理の「みみ」というものを実食することで、その地域の魅力や深みみたいなものにも触れられた貴重な機会でした。

また、現地で学んだことというのを、一旦、大学に持って帰ってきて、では富士川町にはどのような政策提案があるのかと考えて、三つの政策テーマを挙げました。それをプレゼンにまとめて富士川町の現地の方々に直接聞いていただくという機会を設けたのが、富士川町のまちづくりシンポジウムです。こちらが富士川町のまちづくりシンポジウムのポスターで、ゼミ生の白川が作成したものになります。

また、日本を知るプロジェクトというイベントにも参加しました。フィールドワークの一環で、増穂登り窯という陶芸作品をつくっていらっしやる場所にインタビューしにお伺いした際、そちらの出会いがきっかけになって、富士川町に毎年訪れる慶星大学の韓国の学生と富士川町の皆さんが触れ合う交流会というものがあるから、そこにみんなも来て手伝ってくれないかということでお誘いをいただきました。

下が徳永ゼミのゼミ生で、後ろが慶星大学の学生さんです。もちろん言葉の壁みたいなものはありましたが、学生同士、年が近いということもあり、お互いの趣味であったり、母国についてお話しできて非常に楽しかった思い出です。また、現地の方のお話もたくさん聞けて、食事の場だからこそ、あまり堅苦しくなく、尚且つ深いところまで伺えたと感じています。

私たちは主に富士川町をターゲットにしてまちづくりを行ってきましたが、では私たちの大学がある八王子市に關してはどういうまちづくりができるのか、というものを考えて、結果、八王子学生まちづくり協力隊の創設という政策提案を発表したのが、大学コンソーシアム八王子です。その際は発表者だったので、当時の私は今みたいに人の前でお話ししたり、発表することがすごく苦手だったので、敢えてそれに挑戦することができた非常に思い出深い活動です。また、このまちづくり協力隊の創設というのは、八王子市の魅力だったり、課題だけではなくて、富士川町でまちづくりをしたことで地方の魅力と課題を含めた視点だからこそ生まれた提案だなど思っています。

こちらはゼミの活動ではなくて、自身の活動になるんですけれど、国際学部で農業コースを専攻しているので、三年生になってから北海道拓殖大学短期大学に半年間だけ編入して農業を学んできました。学校も変わって、バイト

も変わって、家も変わって、全ての環境が変わることで、結構、戸惑ったのですが、そんな時に支えてくれた方というのが、あちらの大学の先生方だったり地域の人達でした。深川市をたくさん知りたいたいなと思っていたので、半年間という短い間にたくさんアルバイトもしたのですが、そのときにかわいがっていただいた地域の方々はもちろん、本当に自分の娘だったり、昔からの友人みたいに暖かく迎えてくれたなど感じています。

四年間という短い大学生活の中で、私は環境と学友に恵まれました。地元は茨城なんですけど、それ以外にも山梨県富士川町、北海道の深川市、東京都八王子市という場所に足を運ぶことができました。私のような学生にできることなんてあるのかなど、正直、当初は思ったんですね。まちづくりや地域創生みたいな言葉を聞いても、自分ができることがあるのかなど考えていたんですけども、実際に行動に移してみたときに、地域の方々が本当に興味を示してくれて、すごく話を丁寧に聞いてくれて、質問を返してくれて、さらに自分の考えみたいなのも私に教えてくれました。実際に私たちがまちづくりに参加する上でも、その現地の方々のサポートというのが絶対なくてはならなかったものでした。これだけ私がたくさん活動をできて、学びを深めてこられたのは、現地の方々がそれだけ協力して調べてくれていたということの証拠だなと考えています。

田舎と都会というのは、やっぱり人の数だったり、交通機関のアクセスという面では本当に違うなど、正直、圧倒的に違うなと感じています。ただし、田舎は豊かな自然とおいしい食べ物と暖かい人というものですごくあふれているなど感じています。しかし、その二つというものは全く違うものではありません。都会でおいしい食事ができるというのは、田舎で豊かな自然があつて、生産者さんというものがその食材をつくっているからです。都会と地方が常につながっているということも今回の活動を得て学ぶことができました。シンプルですが、まずはお互いの魅力というものをよく知ることが、まちづくりを行う上で一番重要なことなのではないかなと思っています。それに気づけたことが大きな学びだなと感じています。以上です。

ご清聴、ありがとうございます。

徳永 高橋さん、ありがとうございます。

それでは、これで発表は終わりにしたいと思います。これからは、このメンバーで質疑応答をして、その後に、皆さんフロアの方と意見交換を図っていきたいと考えています。

八・地域連携センターの展望（ディスカッション）

徳永 まず川名学長に質問です。拓殖大学の地方創生、拓殖大学の持つ地方創生というのは何かほかのものと違うのか、あるいは何か特徴、売り、強みがあるのか、そういったものを改めてご説明いただければと思います。

川名 さっき話をしましたけれども、一つは、やはり国際大学であり、そういう意味でいうとずっと伝統的にも国際的な活躍をしている先輩もいらつしやいますし、今でも国際学部などでは海外へ学生がしょっちゅう行ったりという方もしています。恐らく日本の今までの地域活性とか地域創生というのは、あまり国際的なことを考えたことがなかったのではないかなというふうに思います。そういう意味では、先ほど徳永先生のアフリカの話もありましたけれども、それと同じようなものは日本でも実は残っているんじゃないか。従って、学問的にもおもしろいだろうし、恐らく今までなかったアイデアも出てくるだろうしということが、やっぱり一つの大きな特徴というふうに思います。それから、これもさっき言いましたけれども、やはり先輩とのつながりといいますか、そういう意味でこれだけ歴史のある大学ですから、多くの卒業生が、既にいろんな地域で活躍している人たちがいっぱいいます。そういった方たちも非常に私たちが応援してくださっていて、例えば最近ですと、ロサンゼルス、香港、マカオというような、この本学の先輩たちが、うちの学生を招いてくださるというような形で非常につながりが強い。そういったつながりをうまく使わせてもらうとか、そういったことをやることによって、一味違った地方創生や地方活性化ができるんじゃないかなというふうに思っています。

徳永 ありがとうございます。それでは、永見先生に質問です。デザインを用いて地方にかかわる意義、強み、

デザインだからできることについて詳しく説明していただけますか。

永見 国際学部の徳永先生のゼミや商学部の潜道先生のゼミと一緒にデザイン学科の学生が意見交換をした経験からお話すると、調査、分析、企画づくりや行動力は徳永ゼミ、潜道ゼミは優れていると感心しました。

デザイン学科の学生はおとなしい学生が多いんですけど、その中で優れていると思ったのはアイデアの視覚化です。アイデアをモノグラフィックで表現する能力です。この表現力がまちづくりにもうまく使えるのかなと思っています。まちづくりはいろんな人が関わるので、合意形成がすごく大事になります。こんなアイデアでまちを活性化したいという一枚の絵があると、合意形成や意思の統一がしやすくなります。デザイン学科では土川君のようにプロダクトコースでモノをつくる経験もしていますし、メディアデザインコースではグラフィックやホームページなどの伝えるデザインをしていますので、まちづくりに活かせると思います。

徳永 ありがとうございます。

「コミュニティデザイン」についても少し突っ込んでいきたいんですけども、工藤先生がこの会場にいらっしゃっていますので、補足をお願いしたいと思います。

工藤※ デザイン学科の工藤です。何度か名前を出していただきました。コミュニティデザインというキーワードにつきまして少しだけ、私なりの説明をさせていただきます。

私は「ソーシャルデザイン論」、「ソーシャルデザイン・演習」という科目を担当しております、研究室の名称が、これは自分で決めるのですが、コミュニティデザイン研究室です。私の定義になりますが、ソーシャルデザインを平易に言えば、「社会的な課題を創造的に解決しようとする活動」のことです。この「創造的に」というのがポイントになります。そして、そのコミュニティ版がコミュニティデザインというわけです。

コミュニティデザインの主役は誰かという点、コミュニティを構成する人たちです。今回のお話で言えば、地域住民ですね。地域住民の主体的な活動を拓殖大学のデザイン学生がどのようにサポートできるのか、というのが研究室

のベクトルになるのですが、学生の存在価値は何かと言えば、単に若くて元気な働き手ということではなく、地域住民を元氣付けることができる、その心を動かすことができる、というところにあると思います。そもそも、デザインにはそういうことが含まれているのです。

先ほど「みみ」の話がありました。恐らくあの活動も、商品開発が主目的ではなく、そのことによって地域住民の誇りを育む、元氣を下支えする、このあたりがとても大事なのだろうと考えます。そういうことも含め、具体的なコミュニティデザインの事例を知り、サポートの実践に取り組むという流れを大事に考えているところです。

徳永 ありがとうございます。デザインが地域を元氣にするというところが肝心なところだということですね。「みみ」の話になりましたので、去年、学生チャレンジ企画にも参加された原さんに、自分が参加してみてどうだったかという感想をいただきたいと思います。

原※ デザイン学科四年の原絵里子です。デザイン学科として何ができるかといったら、先ほど永見先生が仰っていたのですが徳永ゼミの皆さんの意見を視覚化して、全員が共通の意識で動いていけるようにサポートすることです。そんな風になるからサポートする気持ちで参加していました。「みみ」のプロジェクトのような、地域と関わる機会があるおかげで富士川町の方と接する貴重な体験ができたので、本当に拓殖大学に入って良かったなと思いました。ありがとうございます。

徳永 ありがとうございます。学生二人にも改めて聞きたいんですけど、二人がこうやって地方にかかわることで、どうでしょう、地方を見る目が変わったか。あるいは、自分自身が将来、地方で生活したいと思うようになったか。ちょっと難しいかもしれませんが、学生が地域づくりにかかわった経験は、将来、生きるか。この三つについてまとめた形で、お二人、お話しただけですか。

土川 地方を見る目は変わったかという点では、やはり学生は何かないと地方に行かないと思います。今回、自分も長野県へ行ったことがない状態で鹿教湯温泉に初めてそのプロジェクトで長野県に行きました。長野県で知らない

地域に行つて調査することによって、特色とかその地域の伝統とか身に触れて、おもしろいと思いました。行かなかつたら知らなかつたことが多くあり、やはり見る目は変わりました。

地方で働きたいかという質問ですが、私は栃木出身なんですけど、東京で働きたいと思つて出てきました。ですが、この今回の地域連携型の授業を通して、地方で一からスタートして生活するのもおもしろいんじゃないかと考えるようになってきました。

最後ですが、こういった経験が活かせるかという質問ですが、はっきりとはわかりませんが、今後どこかでは活かせると思います。

高橋 ご質問をいただきました、地方を見る目が変わったかということですね。私の出身は茨城ですが、もともとこつちに出てきて、まちづくりみたいなのに取り組むのも、ゼミに入るまで全くなかつたですし、正直、関心みないなところもありませんでした。本当にきっかけみたいなのでした。地方出身なので、都会に対するあこがれみたいなのはもちろんあつて、人がもちろんたくさんいますし、はやりのもものもたくさんあるし、おしゃれなものもたくさんあるということで、東京は、イコール、すごくいいところみたいな、田舎、イコール、人がいなくて、アクセスが悪くて、課題しか見えていなかったんですね。

ただ、深川市だったり、こちらの高尾もそうなんですけど、高尾に一年生から二年生までの間、全て住んでいたというのがありますし、深川市にも半年間だけ住めたということもあつて、絶対どこかしらそこにしかない魅力があるんだなというところに心底、気づきました。そういう意味で、地方、イコール、少し劣っているところというのではなくて、また違ったよさがあるという面が見えるようになったかなと思つています。

将来、地方で働きたいかということなんですけど、働きたいと思いません。何でかというのと、一年から二年生の間に高尾で住んでいたおかげで、私は今すごく高尾が好きになりました。自然もすごく好きですし、都心とはちよつと離れて、時間とかもかかるし、アクセスがあまりよくないかもしれないかもしれませんが、人の豊かさとか、優しさみたいな、

ゆっくり時間が過ぎていような感じがすごく好きだなと思います。

深川に半年間だけ住んだときも、現地の方々には本当にこんなに密に接してくれるんだというのは、すごく感動を覚えました。深川市も高尾も私にとって大事な場所です。そういう場所というのは、その地方で働くことによってふえていくので、もつとすばらしいことだなと思います。

この経験が将来、生かせるかどうかということなんですけど、まちづくりということに対して、まちの課題とか、よさみたくないものを見つける能力みたいなものも必要かと思いますが、行動力や挑戦力というものが、身についたなと思っっています。本当に行かなければわからないということと、やってみなければわからないということがありました。現地の方々が私の話なんか聞いてくれるのかなと当初は思っていました、それをちゃんと聞いてくれるという経験を通じて、行動力が大事なんだなと思いましたし、思いついた政策提案というものを、「こうだと思えます」と自分で発信していく挑戦力みたいなものもすごく生かせる活動だったなと思っっています。

このようにまちづくりの活動は、将来の様々なことに生きてくるのではないかと思うので、生かせると思います。以上です。

徳永 ありがとうございます。このまま縮めてもいいぐらいですけど、せっかくです、このフロアの方、二つぐらい、質問を受けて終わりたいと思います。何か補足したいとか、聞いてみたいとか、学生でも結構ですので、何なりと。武田先生、もし科研費のお話を含めて補足があれば。

武田※ では、科研費のことをちょっと補足します。今後、拓殖大学のこの新しいセンターができたばかりですから、それに期待するところというのも含めて私がやっていることを補足したいと思います。

下條村が挙がりましたけれども、あの中できょう徳永先生が言っっていますんですけど、二つのことをやっっています。一つが、アンケート調査をしています。それも全員にアンケートをかけているんですね。そのまとめが、徳永先生がおっしゃっていましたけれども、建設資材支援事業をして、村に愛着ができたかどうか、地域の連携が深まった

かどうかということなんです。これは言うのは簡単なんですけど、これをやるためには分析方法を覚えなければいけないんですね。これを担当したのは私とか、東工大の川崎先生と、あとは日大の僕の後輩になる学生なんです。平たく言うと、共分散構造と因子分析という手法を覚えなければいけない。

僕はこの大学で一番弱いのはそこだと思っっているんです。なぜかというところ、これは日本だけじゃないですね。政策提言までは行くんですよ。我々が大学にいたときは、実は都市再生というのがありまして、私も夢ロードというのがありまして、実は応募して優秀賞を取ったことがあるんですが、結局、何もならないんですね。政策提言はやるんですが、政策に結びつかない。なぜかというところ、客観性がないからですね。客観性というのは分析からしか得られないというところがあります。

私は今ほとんど海外のプロジェクトの話ばかりしていますけど、海外ではなぜそういうものが政策に直結するかというところ、やはりお金がないんですね。我々が下條村に訪れたときも、はっきり言って、お金がないんですよ。お金がない中でどうやったら最大に効率化できるか。ましてや、下條村の場合は独立する。つまり、補助金というひもつきのものでなくて、村独自の予算内でやる。だから、独自性ができる。これを手助けする。その効果があったということの一つでアンケート調査をする。それをちゃんと分析するということですね。

もう一つ、私がやったのは、建設資材支援事業のようなものをやる。つまり、例えば学生さんが現地へ出かけていて、村のために何かお手伝いをするということは、これは産業的に、経済的に見ると、人の仕事をとってしまうというところになるんですね。つまり、波及効果としてはマイナスになってしまう。それがどの程度の影響があるのかというところ、つまり、いいほう、いいほうではなくて、マイナスのほうを含めて僕は客観性だと思っっているんですが、マイナスのほうの計算もして、全てを考えた上で政策につなげていく、直結するというところが、次のステップで必ず必要になってくると思うんですね。

徳永 ありがとうございます。分析を通じた政策提言が重要だということですね。

武田 はい。

徳永 政策提言を客観的に、科学的にやれるような、そういった体制を構築する必要もあるのではないかというところで、非常に示唆に富んだお話でした。ありがとうございます。

はい。下條先生。

下條※ 下條村は下條氏に由来しますが、その下條です。拓大に地域連携センターができたことは非常にいいことだと思います。私が拓大に来たときにはそういうものがありませんでした。ここから始めていただければありがたい。

そして、先ほど徳永先生のほうから、山梨県のぶどうが日本一だと言われましたね。あれも実は前田正名が、「興業意見」というものを書いた人が、知事るときに、地域振興のために始めたのが葡萄なんですよ。それが今日につながっています。それから、拓大の歴史でいえば、一九〇八年にはじまった地方改良運動とも拓大は関係が深いのです。この運動は拓大の関係者が中心となっており、言ってもいいのです。それは行政的に行ったものですが、今日こちらで学生さんの話を聞いていますと、大学と学生が参加している。これは新しいものですね。

それから、先ほど徳永先生のほうからお話がありました。道路を地元の人に協力してもらって、地域からも人を出しながらやる。あれは戦前、拓大の卒業生が中心となって朝鮮半島でやっていた協同組合活動と同じです。それをまねて戦後、韓国がセマウル運動（新しい村づくり運動）というのをやっているわけです。セマウル運動でも同じように、農民の力で村おこしをしている。そういう歴史がたくさん拓大にはあるわけですね。

であれば、ぜひこの地域連携センターをより活性化させて、今、武田先生がおっしゃったように、具体的にどうしていくのか。一番大事なのは、収益性をどう上げていくかということですね。多分いろんな遠いところに行くときに、交通費は自弁で、大変ですよ。ですから、できれば、今ログハウスもそういう意味でつくっていただいたんですが、ああいうところを利用していろんな方に来ていただく中でお金が得られるような、例えば障害者の方に来ていただいで、工学部の学生と一緒に車椅子のデザインを改良したり、障害者の方が生活しやすい工夫をするとか、いろいろな

ことがこの大学の中でできるのではないか。外に行くことも大事ですが、やはり大学というものを拠点として、周辺の地域に広げていくということも発想としては必要ではないかなと思いました。

きょうは大変感銘を受けて、今、緊張しながらお話ししています。いい学生さんが育ったということ、私は自分自身、ゼミの教員として非常に恥ずかしく思いつながら聞かせていただきました。どうもありがとうございました。

徳永 ありがとうございます。せっかくですから、もう一人ぐらい、いかがでしょうか。フロアの方から。大丈夫ですか。では、最後に、学生さん、どうですかね。

榎本※ 国際学部国際学科二年の榎本です。私は徳永ゼミに所属していて、これからいろいろ地方創生のプロジェクトにかかわっていくことがあると思うのです。

まだ何もわからないので、プロジェクトを進めていく上でつまづいたこと、またそれを今後、新しいプロジェクトを進めていく上でどのように改善していったらよいかなど、アドバイスをあったら教えてください。

徳永 非常に良い質問です。プロジェクトで、つまづいたときとか、苦しいときとか、学生の皆さんはどう乗り越えましたか。

高橋 なるほど。そうですね。つまづいたこと……。基本的にいつもつまづいているんですけど、一番大きかったのが、八王子コンソーシアムの話になるのかと思います。最初はプレゼンがひどくて。本当にひどかったですね。それで、人の前で発表することも苦手だったので、自分のためなところというのを人に見られなくなかったですよ、そのときは。それが個人的に一番、自分自身がつまづいたことだなと思っています。

そのときにどうしたかという、みんなの考えてくれた案みたいなものも私のプレゼンでいくらでもだめにできるので、そういう意味でのプレッシャーみたいなものがすごく強かったですね。そのまま背負ってひたすら練習するというのも一つの手だと思うんですけど、それはちょっと苦しいので、その機会を二〇〇%、自分に与えられたチャンスだと考えたほうがいいです。

どういうことかというのと、例えばその八王子コンソーシアムの発表者をやってくださいとなって、「私がやりま
す」となったときに、ほかの人が上手だなと見ていて思ったりすることがあります。「じゃあ、ちよつと誰々さん
も発表者をやってもらおうか」みたいな感じでプレゼンを練習してもらったときに、私よりプレゼンが上手な人は当時ほ
かにいっぱいいたんですね。プレゼンが上手な人というのは、うちのゼミにたくさんいるので、なぜ私がやるんだろ
うと、正直、そのときは思ったんですけど、そのときに私が今できないことをできるチャンスなんだと発想転換す
ると、すごく前向きになれるかなと思います。「今回のチャンスは私がやらせてもらおうわ。ありがとうございます。」というぐら
いの感じの前向きな気持ちだと何でも乗り越えられるんじゃないでしょうか。以上です。

徳永 土川君、いかがですか。

土川 そこまでいいアドバイスはできないかもしれませんが、やっぱりグループワークが多いと思うので、一
人で悩むんじゃないかと、グループのメンバーとかに、どうしたらいいか、聞いたり、一緒に考えたりすること
が重要だと思います。

徳永 ありがとうございます。永見先生、何かございますか。

永見 二〇一四年に産業界ニーズGPに参加させてもらいました。そのときに工学部の学生の就業力の調査をした
のですが、その結果を見ると、就業力が、自分の評価と実際の能力を見ると、自己評価がかなり低かったです。工
学部の学生は自分の能力を低く見ている。ちなみに、留学生はその逆で、非常に自分の能力を高く見えています。

あとは、工学部の学生はおとなしくて素直という印象があるので、なるべく背中を押してあげるとい
うか、チャレンジする機会を与えてあげれば、どんどん成長していくんじゃないかなと思っています。

ですから、地域連携センターで発表する機会が増えて、学生がどんどんチャレンジする機会を増えることを期待
しております。

徳永 ありがとうございます。

それでは、定刻になりましたので、これで終わりにしたいと思います。

地域連携センターはできたばかりです。きょう聞いてわかったと思いますが、具体的なアクションプランとか、ここで何をやるかとか、まだ決まっていません。まだこれからぼちぼち考えていくようなことになるかと思えます。きょうご参加いただいた皆様からのご意見、ないしはご提案を募集して、前向きにいろいろなことに取り組んでいきたいと思いますが、やはり主役は学生だと我々は思っています。こうやって優秀なというか、元気のある学生をどんな地域に送り出していきたいと思っております。ご協力いただければ幸いです。それでは、つたない進行ではございましたが、ここで終わりにさせていただきます。ありがとうございます。（拍手）

本日はどうもありがとうございます。（拍手）

（了）

※発言者（発言順）

工藤芳彰准教授（工学部）

原絵里子四年（工学部）

武田晋一准教授（国際学部）

下條正男教授（国際学部）

榎本彩歩二年（国際学部）

○拓殖大学地域連携センター規程

(設置)

第1条 拓殖大学に（以下「本学」という。）に、拓殖大学地域連携センター（以下「センター」という。）を八王子国際キャンパスに置く。

(目的)

第2条 センターは、本学の建学の精神に則り、本学の教育・研究成果の知を基盤とし、国内外の地域社会との交流及び活性化に貢献すると共に、学外諸機関とも連携して、学生の実践的学修に資することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条に規定する目的を達成するため、次の各号に掲げる事業を行う。

- (1) 地域社会及び学外諸機関との連携・交流・協働に係る活動の推進に関する事項
- (2) 地域社会及び学外諸機関との連携に係る協定作業に関する事項
- (3) 地域社会の課題等についての調査・研究に関する事項
- (4) センターの情報発信に関する事項
- (5) その他センターの目的を達成するために有益な事項

(センター長及び副センター長)

第4条 センターに、センター長及び副センター長を置く。

2 センター長及び副センター長は、理事長が任命する。

3 センター長及び副センター長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

(職務)

第5条 センター長は、センターを代表し、事務を統括する。

2 副センター長は、センター長を補佐し、必要ある場合には、センター長の職務を代行する。

(センター会議)

第6条 センターに、第3条に掲げる事業について審議するため、センター会議を置く。

2 センター会議は、次の各号に掲げる委員をもって構成する。

- (1) センター長
- (2) 副センター長 2名
- (3) 商学部 1名
- (4) 政経学部 1名
- (5) 外国語学部 2名
- (6) 工学部 2名
- (7) 国際学部 2名
- (8) 八王子事務部長（事務統括）
- (9) 八王子学務課長（教学関係担当）

(10) 八王子総務課長（事務担当）

(11) 八王子学生支援室長（学生支援担当）

(12) その他、センターが特に指名した者

3 委員は、学長が委嘱し、その任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。

4 センター会議は、センター長が招集し、その議長となる。

5 センター長は、審議内容を学長に報告しなければならない。

（その他）

第7条 地域連携事業の活動内容により学外諸機関から事業経費の支弁を受ける場合がある。

（事務）

第8条 センターの事務は、八王子事務部が行う。

（改廃）

第9条 この規程の改廃は、理事長が決定する。

附 則

1 この規程は、平成30年4月1日から施行する。

2 この規程の施行により、最初に任命されることとなるセンター長及び副センター長の任期は、第4条第3項の規定にかかわらず、平成31年3月31日までとし、再任を妨げない。

平成30年度地域連携センター会議委員

1. センター長	学 長	川 名 明 夫
2. 副センター長	常務理事	河 田 昌 一 郎
3. 副センター長	副 学 長	山 田 政 通
4. 委 員	商学部准教授	松 橋 崇 史
5. "	政経学部教授	山 本 尚 史
6. "	外国語学部准教授	関 口 美 幸
7. "	外国語学部准教授	藤 本 淳 史
8. "	工学部准教授	工 藤 芳 彰
9. "	工学部准教授	永 見 豊
10. "	国際学部教授	竹 下 正 哲
11. "	国際学部教授	徳 永 達 己
12. "	八王子事務部長	鶴 木 則 夫（事務統括）
13. "	八王子総務課長	上 條 聡 視（事務担当）
14. "	八王子学務課長	峯 太 加 志（教学関係担当）
15. "	八王子学生支援室長	野 村 貴（学生関係担当）

◆事務局：八王子事務部

類

発行 平成30年6月30日
発行者 八王子事務部
〒193-0985
東京都八王子市館町815-1 八王子国際キャンパス
電話 (042) 665-1443